

一 語り手「私」と秘密

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)の『二都物語』(*A Tale of Two Cities*, 1859)¹は、フランス革命前後のロンドンとパリを背景に、革命という一大事件に翻弄されたマネット医師(Doctor Manette)とその家族のたどる運命、そしてルーシー(Lucie)・マネットへの愛のために、彼女の夫チャールズ・ダーネイ(Charles Darnay)の身代わりとなって処刑されるシドニー・カートン(Sydney Carton)の数奇な生涯をプロットの中心に据えた物語である。「それは最良の時代でもあり、最悪の時代でもあった(It was the best of times, it was the worst of times)」(5)という書き出しで始まるこの作品は、全知の語り手に導かれて進行していく。例えば、割れた酒樽から道路に流れ出るワインを民衆がすすめる有名な場面において「そのワイン [註：ここでは「血」のこと] もまた、通りの敷石の上を流れ、そこの多くの者たちがその染みで真っ赤になる時がやって来るのであった(The time was to come, when that wine too would be spilled on the street-stones, and when the stain of it would be red upon many there)」(32)と言うように、語り手は「規則的に、何が起きるかを自信たっぷりに予測する(regularly offers confident forecasts of what to come)」²。またこの語り手は、革命前では抑圧された民衆への同情を喚起するように、革命後は暴徒と化した民衆に対する嫌悪感を抱かせるように、巧みに読者を誘導している印象を与える。その語り手が、第一巻第三章の冒頭で、突然「私」として顔を出す。

A wonderful fact to reflect upon, that every human creature is constituted to be that profound secret and mystery to every other. A solemn consideration, when I enter a great city by night, that every one of those darkly clustered houses encloses its own secret; that every room in every one of them encloses its own secret; that every beating heart in the hundreds of thousands of breasts there, is, in some of its imaginings, a secret to the heart nearest it!...My friend is dead, my neighbour is dead, my love, the darling of my soul, is dead; it is the inexorable consolidation and perpetuation of the secret that was always in that individuality, and which I shall carry in mine to my life's end. In any of the burial-places of this city through which I pass, is there a sleeper more inscrutable than its busy inhabitants are, in their innermost personality, to me, or than I am to them? (14-5)

人間は皆、お互いにとっては全くの秘密と謎で出来ているということは、一考に値する

驚くべき事実である。夜、私は大都会に足を踏み入れると、暗闇に林立する家々の一つ一つがそれぞれ独特の秘密を隠し持っているなんて、その家々にある部屋の一つ一つがそれぞれ独特の秘密を隠し持っているなんて、そこに住む何十万という人々の胸の中で鼓動する心の一つ一つ、それが想像することのいくらかは、最も身近な者の心にとって謎であるなんて！と真面目に考えてみる。(中略)友が死んだ、隣人が死んだ、愛する人、心の愛しい人が死んだ。その個人の中に常に存在したものを、私も人生の終わりまで自分の中に持ち続けるものは、秘密の避けがたい固化、永久化なのだ。私が通り過ぎていくこの都会の墓場のどこかで眠っている者は謎めいた存在であるが、それよりもさらに謎めいているのは、私にとってはそこで忙しく暮らす人々の、彼らにとっては私の、胸に秘めた人格なのではないか？

超然的立場にいる物語の語り手というよりも実在する一個人として「私」が登場し、まるでその日常を垣間見せているかのようだ。「私」とは一体どのような人物で、物語の進展とどう関与していくのかといった疑問が当然浮かぶわけだが、「私」という言葉が使われるのはここだけで、「私」は自己紹介をせずに...それから永久に姿を消す(The 'I' does not introduce himself...then vanishes for ever)」³。

まず着目すべき点は、ここで作品の主要なテーマが提示されることである。個人の中に潜み、一番身近な人間にさえ理解出来ない「秘密」や「謎」の存在というこの作品の根底を流れるキーワードがここで示される。『二都物語』は様々な人物の秘密を内包した物語である。マネット医師の秘密、シドニー・カートンの秘めた思い、チャールズ・ダーネイの素性の秘密、復讐の鬼と化したマダム・ドファルジュ(Madame Defarge)の怨念の根源、昼間の顔と夜の顔を持つジェリー・クランチャー(Jerry Cruncher)の秘密などがその代表的な例として挙げられる。また、語り手が「彼の心の謎を読み取ることは人知の及ぶところではなかったであろう(No human intelligence could have read the mysteries of his mind)」(51)、と登場人物の秘密の大きさを強調したり、マネット医師が「娘のルーシーのことは、この一点に関して言えば、私にはさっぱり分からない。娘の気持ちなんて全く想像できんよ(My daughter Lucie is, in this one respect, such a mystery to me; I can make no guess at the state of her heart.)」(140)と嘆くように、ある人物が別の人物の計り知れない謎に言及したりする。これらのことから、『二都物語』は「個人の秘密についての物語(a history of individual secrets)」⁴と言える。

『二都物語』はサスペンスの効果を存分に生かしながら、これらの秘密が物語の進行とともに明らかにされたり、他人によって暴かれていく物語、あるいは登場人物や読者が、少しずつ与えられた情報を手掛かりに、これらの秘密を読み解いていく物語と言える。アルバート・フター(Albert D. Hutter)は「この小説はスパイで溢れている(The novel is filled with spies)」⁵と指摘しているが、他人の秘密を詮索するのは正にスパイの行為である。ジ

ジョン・バーサッド(John Barsad)やロジャー・クライ(Roger Cly)のように正真正銘のスパイとして登場する人物だけでなく、他の人物や読者もいわばスパイと同じ行為をしていることになる。

その「秘密」という作品の鍵となる概念について述べる際、語り手はわざわざ自己の不可視性に言及し、自分に理解不能な領域があることを認めた。語り手としての信用を読者から失いかねない危険を孕んでいるにもかかわらず、自らの限界を語った真意はどこにあるのか。そしてそのような語り手の態度は、語る行為にどう反映していくのだろうか。この語り手の発言は「親しい人に究極的には近づけないことを痛切に嘆くものではなく、秘密は絶えず存在するが、常に我々の完全な理解を超えているだけだと言って安心させるものと(not as a poignant lament about the ultimate inaccessibility of one's intimates, but as a reassurance that the private will always be there and yet will always be just beyond our full comprehension)」⁶解釈することが出来る、とキャサリン・ギャラハー(Catherine Gallagher)は言う。確かに語り手は、秘密があることを「驚くべき事実」と言うものの、理解出来ないことを嘆いてはいない。ここでのディケンズの意図についてJ. M. リグナル(J. M. Rignall)は「ディケンズはここで小説から一步出て、小説中よりもむしろ実生活における人格、個人を一般化している(Dickens here steps out of his own fiction to generalize about character and individuality in life rather than in books)」⁷と述べている。しかし、「私」が登場したすぐ次の段落では、話を物語の中に戻しはするが、「彼らはお互いに謎であった(they were mysteries to one another)」(15)と語り手の意識の中心は引き続き秘密という概念にあるので、物語の外に出たというよりもむしろ、個人の秘密を理解することは不可能という一般論を物語世界に持ち込んだと考えてもいい。それでは理解不可能な個人の秘密という領域を「私」たる語り手はどう読者に伝えていくのか。結果としてこの作品で提示される秘密の多くは最終的には読者の知るところとなる。つまり、語り手はどうかして読者にきちんと伝えているのである。とすると、他人に理解出来ない個人の心の中にある秘密を語り手はどのようにして読者に伝えているのか。この点をマネット医師とシドニー・カートンに注目してここでは検討してみる。

二 マネット医師の秘密

物語が動き始めるのは、テルソン銀行の行員ジャーヴィス・ロリー(Jarvis Lorry)が、バステューユ監獄に十八年幽閉されていたマネット医師を向かえに行く旅の場面からである。ここでこの作品を貫く基調が示される。ドーヴァーに向かう道中、ロリーはジェリー・クランチャーに「生き返った(RECALLED TO LIFE)」(12)という謎めいた伝言を預ける。そして馬車の中でロリーは何度も夢を見るが、そこではある男との会話が繰り返される。

'Buried how long?'
The answer was always the same: 'Almost eighteen years.'
'You had abandoned all hope of being dug out?'
'Long ago.'
'You know that you are recalled to life?'
'They tell me so.'
'I hope you care to live?'
'I can't say.'
'Shall I show her to you? Will you come and see her?' (17)

「どれくらい埋められていましたか？」
答えはいつも同じだった。「約十八年ってところだ」
「掘り出される望みはすっかり捨てておしまいでしたか？」
「ああずっと前に」
「生き返ったことはお分かりですか？」
「そう聞いているよ」
「生きたい、そうお思いでしょう？」
「分からんな」
「彼女をお見せしましょうか？彼女に会いに行きますか？」

ジェイムズ・ブラウン(James M. Brown)が「再生というテーマ(そして「生き返った」という言葉)が執拗に読者に提示され続ける(The theme of rebirth (and the words 'recalled to life') are kept before the reader insistently)」⁸と指摘しているように、ここでも'recalled to life'という言葉が使われている。さらにここでは'buried'や'dug'といった言葉も用いられているが、これらも作中で反復される言葉である。目を覚ましたロリーは「何ということだ！十八年も生き埋めになるなんて！(Gracious Creator of Day! To be buried alive for eighteen years!)」(19)と呟く。また、語り手は「彼はある男を墓から掘り出しに行く途上であった(He was on his way to dig some one out of a grave)」(17)とロリーの旅を説明している。'recalled to life'、'buried'、'dig'といった断片的に繰り返されるこれらの言葉を組み合わせると、「埋める、あるいは埋められる」「掘る、あるいは掘り出される」「生き返る」というプロセスが出来上がる。これがこの作品の基調である。十八年前に投獄されたマネット医師は人々から忘れられ、死んだと思われていた。彼は独房の中で埋もれていたとともに、人々の記憶の中にも埋もれていたのである。そのマネット医師は釈放された時、精神錯乱の状態にあったが、ロンドンに移住した後、徐々に回復し、投獄前のように医師として生活する。つまり彼は、監獄に埋められ、掘り出され、生き返

るという過程を経たことになる。

マネット医師が登場する場面も注目に値する。マネット医師のかつての召使アーネスト (Ernest)・ドファルジュに案内されながら、ロリーがルーシーを連れてマネット医師がいる部屋へと階段を昇っていくと、マネット医師は男たちに覗かれていた。十八年に及び投獄の結果、精神錯乱をきたしたマネット医師は、何かに取り憑かれたかのように、一心不乱に靴作りに没頭していた。マネット医師が登場する場面がこのような描かれ方をしていることは象徴的な意味を持つ。マネット医師が見世物にされていたことにロリーは怒りを表わすが、マネット医師を覗く行為は、ロリーを初めとした作中人物や読者の行為でもあるのだ。その後ロリーは何度もマネット医師の心の闇を覗こうとする。そして読者がマネット医師に何らかの秘密があるのを知るのは、マネット医師を見つめるロリーを通してである。読者もロリーの視点からマネット医師を見ることによって彼の心の中を覗く行為に巻き込まれることになる。ロリーも読者も心の中に埋もれているマネット医師の秘密を掘り出そうとするのである。

このマネット医師の秘密はダーネイと関係があることが徐々に判明していく。スパイの嫌疑をかけられたダーネイが釈放された時、ロリーがマネット医師に目を向けると、ダーネイを見つめるマネット医師の顔にはただならぬ表情が浮かんでいた。

His face had become frozen, as it were, in a very curious look at Darnay: an intent look, deepening into a frown of dislike and distrusts, not even unmixed with fear.
(85)

何とも奇妙な眼差しでダーネイを見つめている間に、彼の顔は、いわば凍りついてしまっていた。一心に見つめる目は、だんだん嫌悪と不信の念で険しくなり、恐怖が入り混じってさえた。

嫌悪感を抱かせるほどダーネイを見つめていたのは何故かという疑問がここでロリーに、そして読者に生じるのである。

先に「掘る」はキーワードの一つと述べたが、この言葉がマネット医師にとっても特別な意味を持つことが明らかになるのは、ダーネイがある逸話を語る場面においてである。ダーネイはロンドン塔の地下牢で、ある囚人が壁に'DIG'という文字を彫り残した話をする。最初は何かのイニシャルかと考えられ、様々な憶測がなされたが、ついにそれはイニシャルではなく「掘る」の意であることが分かり、そこの床を掘り返してみると判読不能であったが、文書のようなものが出てきたということだった。この地下牢に収監されていた囚人がそれを書き、埋めておいたのである。この話を聞いていたマネット医師は動揺を隠すことが出来ない。その時ロリーはダーネイを見つめるマネット医師の顔に「同じ奇妙な表

情(the same singular look)」(105)を認める。

ルーシーとダーネイの結婚式の日、ロリーはマネット医師に「かつての怯えて放心した表情(the old scared lost look)」(201)を見て当惑する。その後マネット医師は一時的に囚人であった時の精神状態に陥り、靴作りに耽るが、十日後ようやく回復する。ロリーはマネット医師が靴作りの道具を保管しているのがその原因と考え、マネット医師に道具を捨てるよう勧告する。しかし、後にダーネイに死刑判決が下った時、マネット医師は再びかつてのバステュークの囚人に戻り、靴作りの道具を探し回る。マネット医師自身、「そういった心配事がどれほど患者の心を悩ますかなんて、君には分からないよ(You have no idea how such an apprehension weighs on the sufferer's mind)」(209)とロリーに言ったように、ロリーはマネット医師の秘密の深さが理解出来なかったのだ。ここからも他人には理解不能な個人の秘密が、マネット医師を見つめるロリーを通して強調されているのである。

三 マネット医師の手記

ロリーには理解出来なかったマネット医師の秘密は、彼の過去に関わるものである。その過去を明らかにしたのは彼自身が書いた手記であった。物語の中で話題がマネット医師の過去と関係する時、彼は「ボーベイの医師(the Doctor of Beauvais)」という呼称で言及されることに気付く。例えばロリーがルーシーにマネット医師が生きていたことを告げた時、二人は彼のことを名前ではなく「ボーベイの医師」と呼ぶ。また、語り手が「ボーベイの医師」と言うこともある。これはディケンズが用いた仕掛けと言える。出身地である「ボーベイ」は過去と現在のマネット医師を結びつける記号となっているのである。マネット医師が「ボーベイの医師」と呼ばれるのは、話がマネット医師の過去に関係する時だけだからだ。バステューク監獄の独房で綴った手記の書き出しで、彼は「私、ボーベイ出身の不幸な医師、アレクサンドル・マネット(I, Alexandre Manette, unfortunate physician, native of Beauvais)」(331)と自ら「ボーベイ」という言葉を用いて自己紹介をしてから話を始める。この手記がこれまで仄めかされてきた彼の過去と深く関わりがあることが、この一文で明示されているのである。

この手記から、マネット医師がロンドン塔の逸話を聞いて怯えた理由、それに彼が怯えた表情でダーネイを見つめていた理由が明らかになる。独房で手記を書き、それを埋めたのは彼がした行為でもあったのだ。この手記は、彼の秘密だけでなく、ダーネイがフランスの貴族エヴレモンド(Evremonde)一族の生まれであったこと、ダーネイの叔父がかつてマダム・ドファルジュの姉と兄を死に追いやったこと、そしてマネット医師が投獄されたのは、この事実を大臣に直訴しようとしたためであったことなど、これまで登場人物や読者を惑わしてきた多くの秘密を解き明かしている。つまりこの手記は「小説のプロットを

動かす出来事の説明(the explanation of the events which drive the novel's plot)」⁹となっているのだ。マネット医師がこれまで必死に守ってきたこれらの秘密が、最も危機的な状況の下で明らかにされる。さらに皮肉なことにエヴレモンド一族を弾劾するこの手記は、一族を「その子孫の最後の一人まで(to the last of their race)」(344)告発すると述べているが、これは「根絶するまで(at extermination)」(353)エヴレモンド一族を告発し続けるというマダム・ドファルジュの言葉と重なり合う。そしてこの文言のために、ダーネイは死刑の宣告を受けたのだった。この手記はダーネイの過去を明らかにするだけでなく、いわば彼の結末も用意していたのである。マネット医師は、将来誰かに読まれることを意図して、この手記を独房に埋めた。ダーネイが自分の娘ルーシーと結婚するとなった時、彼はこの手記のことを忘れようとし、また見つけ出されることもないだろうと考えた。ところが、ドファルジュによってこの手記は掘り出され、ダーネイを亡命貴族として糾弾する裁判に提出されたのであった。つまり、この手記も「埋める」「掘り出される」「生き返る」のプロセスを経ているのである。

このように、マネット医師の秘密は語り手自身の言葉ではなく、この手記によって直接明らかにされる。つまり、マネット医師の手記が語り手の役割を果たし、彼の秘密を読者に伝えているのだ。いわゆる「入れ子式の語り(Chinese-box narration)」である。しかし、注意すべき点は、この手記がマネット医師の手を離れ、他人の口から語られることだ。つまり、「語り手」「マネット医師の手記」「手記の朗読者」と三重の構造になっているのだ。その意味するところは、個人の秘密に入っていけない語り手に代わり、マネット医師の手記が彼の過去を明らかにしたということだけではない。この手記は彼の意思に関係なく他人によって掘り返されたこと、そしてダーネイを告発する意図はこの時のマネット医師には既になく、この手記は「書き手の精神的本質をもはや反映しない死んだテキスト(a dead text which no longer reflects the spiritual essence of its author)」¹⁰であったことをも暗示している。この手記がマネット医師の生の声によって語られたのではないことがそれを如実に物語っている。

四 シドニー・カートンの独白

カートンも謎の多い人物である。彼は常に周囲の人々から一步下がった所や見えない所に隠れ、無益な人物のように描かれているが、実はそうではない。彼には他人が見落とししているものを見る能力が備わっており、登場人物あるいは読者が想像する以上に積極的な役割を担っている。二度にわたりダーネイを危機から救ったのはカートンであった。一度目はロンドンでダーネイがスパイ容疑で裁判にかけられた時である。この場面ではカートンは天井を見つめ、一人だけ裁判に関心を持っていない人物として描かれている。しかし、ダーネイに不利となる証言を強要されたルーシーが気を失いかけた時、それに気付いたの

は彼だけである。また、自分とダーネイが似ていることに感付き、機転を働かせてダーネイの容疑を晴らしたのも彼であった。そしてカートンがこの作品で果たす最大の役割はパリでのダーネイ救出である。パリの裁判の場面でも、意識を失ったルーシーの元にいち早く駆けつけたのはカートンであった。そして彼は亡命貴族として処刑されるダーネイの身代わりとなる決意をする。この救出を考案したのはカートンだけであり、ロリーやマネット医師は何も出来ずに、ただカートンの指示に従っただけである。ジョン・クシチ(John Kucich)が「カートンの才能の特徴は、最も重要で、最も本質的なレベルまで見通す他の人の狭い視野を超えたものを見て、他の人が言おうとしないことを言う この能力である(The mark of Carton's genius is this ability to penetrate to the most important, the most essential levels to see beyond the limited vision of others, to say what others dare not say.)」¹¹と述べているように、カートンは登場人物や読者が考えている以上の特別な力を持っている。この能力は全知の語り手が持つ能力に等しい。つまり、カートンは全知の語り手と同じ役割を果たしていると考えられる。

カートンは独り言をよく口にするが、その多くは自分の心境を吐露したものである。つまり、心の葛藤を語り手の説明ではなくカートンの独白という形で読者に伝えていると言える。そしてカートンは自分がすべき行動についてもよく自問する。彼は「他人にとっても、そして自分自身にとってさえも謎(mystery to others, and even to himself)」¹²なのである。そのカートンは、ルーシーにだけ自分の秘密を打ち明ける。これは登場人物同士で秘密を共有する数少ない例であり、「読者の観点からは、カートンは一瞬ダーネイやマネット以上に、親密な関係をルーシーと持つ(In the reader's eyes, Carton momentarily has a more intimate relationship with Lucie than either Darnay or Manette)」¹³と言える。

'For you, and for any dear to you, I would do anything. If my career were of that better kind that there was any opportunity or capacity of sacrifice in it, I would embrace any sacrifice for you and for those dear to you....The time will come, the time will not be long in coming, when new ties will be formed about you ties that will bind you yet more tenderly and strongly to the home you so adorn...O Miss Manette, when the little picture of a happy father's face looks up in yours, when you see your own bright beauty springing up anew at your feet, think now and then that there is a man who would give his life, to keep a life you love beside you!' (159)

あなたのためなら、それに誰であれあなたの大事な方のためなら、私はどんなこともします。もし私の人生が、犠牲を捧げる機会や資格があるようなもっと立派なものであるなら、私はあなたのため、あなたの大事な方たちのために、どんな犠牲も払うつもりです。(中略)いつか、そう遠くない将来、あなたに新たな絆が生まれる時がやって来るで

しょう。あなたがこんなに飾り立てた家に、あなたをさらに優しく、さらに強く結びつけることになる絆が。(中略)マネットさん、幸せな父親そっくりの幼い顔があなたの顔を見上げる時、あなたの持つ明るい美しさがあなたの足元で新たに芽生えるのを目にする時、時々思い返してください。あなたの愛する大切な人をお守りするためには、命を投げ出す者がいるということ。

ここでカートンがダーネイの身代わりとなるルールが敷かれる。後にパリでの裁判でルーシーが倒れた時、カートンはここで引用した「あなたの愛する大切な人(a life you love)」という言葉が彼女の耳元で囁く。(349)つまりカートンは自分の未来を語る予言者の役割を果たしていることになるのだ。また、彼は全知の語り手を模倣しているとも考えられる。‘The time will come...’は、語り手を連想させる言い回しである。語り手が革命を予言したように、カートンの語りも自分の未来を予言するものなのだ。この他にも例えば、鏡に映る自分に向かって言う「あの男と立場を変えてみたら、あの男のように、お前はあの青い目に見つめられただろうか？あの男のように、困惑したあの顔の持ち主に同情されただろうか？(Change places with him, and would you have been looked at by those blue eyes as he was, and commiserated by that agitated face as he was?)」(89)という言葉も、予言の働きをしていたことになる。またダーネイ救出の方法を思いついた時に語る「だんだんと、私が手当たり次第にやってきたことが、ひとりでに目的を持ってきたみたいだ(And gradually, what I had done at random, seemed to shape itself into a purpose)」(309)という言葉は、語り手の「起こるべきことがひとりでに形になっていった(the thing that was to be, went on to shape itself out)」(247)という言葉と響き合うものでもある。このようにカートンは、語り手と似たような表現を用いて全知の語り手を模倣し、自分の未来を語っていると言える。

物語を締めくくるのはカートンの独白である。自分の行為がルーシーの子供たちに語り告がれていくだろうと、自分の死後についての希望的将来を彼は語る。「カートンは死んでも、ルーシー、ダーネイそして二人の娘の中で彼は生きる(Though Carton dies, he lives in Lucie, Darnay, and their daughter)」¹⁴という希望である。この中でカートンが「私には見える(I see)」と語るように、彼は「自分の物語の結末を全知のごとく予見する(omnisciently foresees his story's conclusion)」¹⁵。しかしこのカートンの語りもマネット医師の手記と同様の、あるいはそれよりも複雑な問題を孕んでいる。カートンの語りには次のような但し書きが付けられている。

One of the most remarkable sufferers by the same axe a woman had asked at the foot of the same scaffold, not long before, to be allowed to write down the thoughts that were inspiring her. If he had given any utterance to his, and they were

prophetic, they would have been these: (389)

それほど前のことではないが、同じ斧の犠牲者の中で最も際だった者の一人 女性であった が同じ断頭台の下で、溢れ出る思いを書き留めたいと許しを請うたことがあった。もしも彼が自分の思いを発言していたなら、そしてそれらが予言的なものなら、このようなものであつたらう。

‘prophetic’とここでもカートンの語りは予言的な役割を与えられている。しかし、「もしも彼が…」と条件付でカートンの語りは導かれるのである。さらにこれは「発言」であつて、カートンが書き留めた言葉ではない。マネット医師の手記は確かに彼自身によって書かれたものであつたが、この語りは実際にカートンが口にした言葉でも、彼が書き残した言葉でもない以上、存在そのものが怪しくなる。つまり、「彼[語り手]はカートンの言葉で自分が知っていることを我々に語っているのか、あるいはカートンが考えたであろうことを語っているのか?これは現実なのか、あるいはカートンの空想に過ぎないのか?(Is he telling us what he knows in Carton's words, or is he telling what Carton *would* have thought; is this the reality or only Carton's fantasy?)」¹⁶という疑問が生じるのである。少なくとも、この語りはこれまでのカートンの語りとは性質が異なる。この独白はカートンに見せ掛けた語りに過ぎず、それゆえに真実味に欠けているとも言えよう。パリから脱出する時、ルーシーやロリーが心配していたのは追っ手が来ないかどうかだけであり、彼らはカートンのことは全く気に掛けていなかった。ちょうどロンドンの裁判でダーネイを助けた時、カートンに謝意を表わすものが誰もいなかったように、彼らから直接カートンへの感謝の言葉を聞く機会には読者にはない。ここからも最後のカートンの語りは絶対確実な未来とは言えないのである。

五 結び

マネット医師とカートンは、例えばルース・グランシー(Ruth Glancy)が「マネット医師とカートンの間の類似は、小説が結末に近づき、カートンが話の筋の中心としてマネットに取って代わるにつれて大きくなる(The parallels between Doctor Manette and Carton draw closer together as the book near its end and Carton takes Manette's place as the center of the action)」¹⁷と評しているように、比較対照させて論じられることが多い。ここまで述べてきた語りという観点に立つと、マネット医師は過去を語り、カートンは未来を語るという違いはあるが、語り手の立場を取り、自分の秘密を明かすという点で二人は類似している。

冒頭に述べたように、語り手は個人の秘密は理解出来ないという自らの限界を提示した。

そしてそれは物語の語りの方にも影響を与えている。この語り手は、革命については堂々と力強くその行く末を予言してみせる。しかし、現実世界において個人の秘密が理解出来ないように、登場人物個人の過去や未来の秘密に立ち入り、それを語ることはしない。そこで、マネット医師の手記や cartoons の独白などが例証しているように、それぞれが自ら語ることで、個人の秘密という語り手に理解不能な領域を読者に伝える方法を採用、秘密の深さを強調する結果となった。しかも、マネット医師の手記を他人に朗読させることで、もはやマネット医師の意思を反映しない手記とマネット医師の間に隔たりを生じさせたり、cartoon の最後の語りにも直接性を与えないことで、その実現性を曖昧にしている、といったような効果を生み出す複雑で精緻な語りの構造となっている。

註

¹ テクストとして Charles Dickens, *A Tale of Two Cities*, ed. Richard Maxwell (London: Penguin, 2003) を用いた。本書からの引用は全て本文中に頁数を記す。なお、日本語訳は拙訳。

² John R. Reed, *Dickens and Thackeray: Punishment and Forgiveness* (Athens: Ohio UP, 1995) 258.

³ Anny Sadrin, "The 'Paradox of Acting in *A Tale of Two Cities*,'" *The Dickensian* 97 (2001): 127.

⁴ Reed 261.

⁵ Albert D. Hutter, "Nation and Generation in *A Tale of Two Cities*," (1978), rpt. in *Charles Dickens's A Tale of Two Cities, Modern Critical Interpretations*, ed. Harold Bloom (New York: Chelsea House, 1987) 40.

⁶ Catherine Gallagher, "The Duplicity of Doubling in *A Tale of Two Cities*," *Dickens Studies Annual* 12, ed. Michael Timko, et al. (New York: AMS, 1983) 141.

⁷ J. M. Rignall, "Dickens and the Catastrophic Continuum of History in *A Tale of Two Cities*," (1984), rpt. in *Charles Dickens's A Tale of Two Cities*, 124.

⁸ James M. Brown, *Dickens: Novelist in the Market-Place* (London: Macmillan, 1982) 123.

⁹ Catherine Waters, *Dickens and the Politics of the Family*, (Cambridge: Cambridge UP, 1997) 145.

¹⁰ Tom Lloyd, "Language, Love and Identity: *A Tale of Two Cities*," *The Dickensian* 88 (1992): 159.

¹¹ John Kucich, "The Purity of Violence: *A Tale of Two Cities*," *Dickens Studies Annual* 8, ed. Michael Timko, et al. (New York: AMS, 1980) 123.

¹² Lloyd 165.

¹³ Kucich 123.

¹⁴ Fred Kaplan, *Dickens: A Biography* (New York: Morrow, 1988) 417.

¹⁵ Chris R. Vanden Bossche, "Prophetic Closure and Disclosing Narrative: *The French Revolution and A Tale of Two Cities*," *Dickens Studies Annual* 12. 216.

¹⁶ Bossche 211.

¹⁷ Ruth Glancy, *A Tale of Two Cities: Dickens's Revolutionary Novel*, (Boston: Twayne, 1991) 74.

『ふぉーちゅん』(新生言語文化研究会) 第18号(2007)